



長倉先生を偲んで

Noboru HIROTA 廣田 襄 京都大学名誉教授

1958年、京都大学理学部の卒業研究でESRによるラジカルの研究を始めたとき、岩波の雑誌『科学』に掲載された化学反応と分子間相互作用についての長倉先生による解説記事に出会い、先生のお名前を初めて知った。先生がこの分野で先駆的な研究をされていることを知って尊敬の念を抱き、自分もいつかこのような分野で研究をしたいと思った。

1959年、私は京大理学部を卒業後すぐに渡米し、セントルイスのワシントン大学でイオンラジカルのESRによる研究でPh.D.を取得、シカゴ大学でのPost-Docを経て1963年にニューヨーク州立大学ストーニーブルック校で教職につき、そこで約10年間教育・研究に携わった。アメリカの大学の助教授(Assistant Professor)は完全に独立で、研究、教育に関して自由ではあるが、新任の助教授の使える予算や装置は限られている。私は化学教室の共用のESR装置や分光器を使ってアニオン・ラジカルのイオン対の構造とダイナミクスに関する研究をスタートさせ、幸い国際的にも評価される成果を得ることができた。1970年頃にはその研究が一段落し、新しい展開を考えるべき時期となった。丁度その頃Sabbatical Leaveを得る権利を得たので尊敬する長倉先生の東京大学・物性研究所の研究室で1年間過ごして研究の新しい展開を考えたいと思い、長倉先生にお願いして1972年9月～73年8月まで物性研の客員研究員にいただいた。このとき長倉先生をはじめとして長倉研の皆さんに大変お世話になり心から感謝している。またこの1年間に多くの日本の学会の方々と知り合いになることができて、私にとっては大变得る所が多かった。70年代の初めはレーザーが化学の研究に使われ始めた時期で、長倉研では励起状態の研究を中心に、いろいろと新しいことを勉強させていただ

いた。また、先生の学問に対しては大変厳しいが、フェアーで真摯なお人柄に直接触れて、研究者・教育者としてあるべき姿について多くを学んだ。

アメリカに帰って再出発を考えていたとき、思いがけなく京大理学部の化学教室に帰る機会を与えられ、私は1975年9月に京大に赴任した。それ以後もいろいろな機会に長倉先生にお世話になりご指導を受けた。先生は1985年に分子科学研究所の所長に就任され、分子科学のリーダーとして目覚ましい活動を開始された。私はその後分子研の運営協議会委員などを務めて分子研の運営にも多少関わりを持つようになった。1989年、周知のように先生は日本人初のIUPAC(国際純正・応用化学連合)の会長に就任されて、化学の分野の国際的なリーダーとして大活躍をされるようになった。

2011年に長倉先生は21世紀を担う若い世代に向けて「複眼的思考」の重要性を説く、『「複眼的思考」ノススメ』を出版された。この本では、科学研究における複眼的思考の重要性、東洋的価値観の導入による調和の文明の創造、志を持つ知的エリート育成など、日本の将来にとって重要な問題についての先生のお考えが述べられている。そして最近の脳科学によって、成熟しきった脳でも頭を使う刺激により新しい神経細胞が出現して脳の活動を維持・進化できることが示されたことを紹介され、志を立て、理想、目標、夢をもち、それらをもとに一生勉強、一生努力の気概で生きることが人生を豊かにするものだと締めくくられた。もうすぐ85歳になる私にとり、これは最も重要な先生からのアドバイスである。

© 2021 The Chemical Society of Japan